

追悼

永安幸正先生の学恩に感謝

水野 修次郎

永安幸正先生からは本当に多くのことを教えていただきました。ここでは、そのエピソードをいくつか述べて、先生の学徳を偲びます。私は、一九九七年の九月に教育研究室の研究員としてお世話になることになりました。先生との最初の面接は、いろいろな学問についてのお話でした。私は、カウンセリング学の最近の発展についてと家族システム理論で有名なジョージタウン家族センターで受けた研修について話しました。永安先生は、カウンセリングに多大な関心をもっていて、興味深く私の話を聞いてくださいました。

先生のお陰で研究はとて自由に行うことができました。一九九八年には臨床心理士の試験に合格し、同年には千葉県のスクールカウンセラーとして臨床の場をもつことができましたのも永安先生のご理解と支援のお陰と感謝しております。また、アメリカでの継続研修や学会にも参加することを促していただけました。永安先生が逝去された後は、チャンスが少なくなりアメリカにはもう五年も出かけていません。先生は国際的にも知人が多く、多くの学者が研究センターを訪れて研究会を開催しました。その際には、いつも私が通訳を務めさせていただきました。通訳をする際には、その人の著書や論文を示していただけ十分に準備をする

ことができました。人を通訳として便利に使うのではなく、私を学者として厳しく育てていただいている感じがありました。通訳の後は、どのような出来であっても、いつも褒めていただけました。

また、二〇〇〇年には道德教育学会が麗澤大学で開催した際に、岩佐信道先生がNY州立大学のトーマス・リコーナ教授を招いて、教授の人格教育についての研究会と講演会がありました。研究センターでは、リコーナ教授の大学院で実際に使っている教材による研究会が開催されました。永安先生は、リコーナ先生の研究を非常に高く評価されて、この研究会の内容を本にまとめるようにと指示をいただきました。私は、博士論文作成という経験やいくつかの論文を作成したことがありましたが、本を出版するという経験がなく、どのように作業を進めるか模索の状態で、いろいろと苦労をして原稿を作成しました。永安先生は、私にとって初めての出版になるということで、いろいろと出版のプロセスについて教えていただけました。また、先生には原稿すべてに眼を通して細かい指示をいただきました。本は、『人格の教育』（北樹出版、二〇〇〇年）として出版することができました。

その出版の経験が大変参考になり、カウンセリングについて出版を思い立ち『カウンセリング練習帳』（トレイン出版）を二〇〇一年に出版することができました。先生は原稿を読んでくださり、いくつかの面白いな表現に赤をいれていただけました。「あまりにも面白い内容なので、朝まで読んでしまったよ」と赤い眼をしていっぱいコメントの書かれた原稿を渡してくださいました。このように懇切丁寧に原稿を読んでいただいたのは、博士論文作成の時の恩師であるケリー先生とラッシュッド教授だけだと思っていました。永安先生からも同様な指導をいただき、育てられているという感激を覚えました。『カウンセリング練習帳』は昨年で六刷目となり、大学や専門学校で教科書として採用されています。

二〇〇一年には、永安先生から『新しい黄金律』（アミタイ・エチオーニ著、麗澤大学出版会）の翻訳依頼をいただき第一章を翻訳させていただきました。先生は、私のつたない翻訳文を褒めてくださり、「内容がよく理解できるように翻訳されているな」といつてくださいましたが、先生はかなり手をいれて一流の日本語として翻訳が完成しました。この時の作業が大変な勉強となり翻訳のしかたを学びました。この経験がトーマス・リコーナ著『人格教育』のすべて（麗澤大学出版会、二〇〇五年）として結実しました。この大著を教育研究室の望月文明氏との共訳として出版することができ、永安先生にはとても喜んでいただけました。

『新しい黄金律』の翻訳作業を進めている内に、永安先生からアメリカでのADR（裁判外紛争解決）についての質問がありました。たまたま私がインターンとして働いたアメリカの高等学校でADR教育を推進していた関係やカウンセリングセンターでのADRを実際に経験していたので、そのことを原稿にして先生に渡しました。これがきっかけとなり『争いごと解決学練習帳』（フレイン出版、二〇〇四年）として出版することができました。また、永安先生はアメリカでのADR研修を認めていただき、ジョージメイソン大学で調停者育成のADR研修を受講することができました。最近、学校でのADR教育を実施する高等学校が出現し、教職員に講義やワークショップをする機会が増えました。

永安先生と密接に作業をしたのが、二〇〇二年のモラロジー研究所主催の国際会議でした。この会議では、廣池千九郎博士の業績と経歴について八本の論文発表がありました。その翻訳作業をピーター・ラフ氏と進めることができました。この会議の報告書は『グローバル時代のコモンモラリティの探求 二〇〇二年モラロジーエンス国際会議報告』としてモラロジー研究所から出版されました。また、英文は *Searching for a Common Morality in the Global Age: The International Conference on Moral Science in 2002*、

いう書名で、インドのニューデリーの Lancer's Books から出版されました。この会議では英文での発表や論文の書き方を学びました。特に、永安先生が外国の学者たちと対等に意見を交換し、学ぶべきことは謙虚に受け入れ、主張すべきことは明確に表現する態度から多くを学びました。

永安先生とは『倫理道徳白書V.01・I』の編集と出版(モラロジー研究所、二〇〇六年)でもいろいろと教えていただきました。白書の構想はいろいろと議論が出ましたが、永安先生は倫理道徳の文献を渉猟して、文献に語らせるという新しい倫理道徳白書の構想を打ち出しました。白書というと、統計資料を使い現状を分析するのが普通のありかたですが、数量の代わりに質的なアーカイブ、つまり出版された文書を使い、質的な分析をするというものです。私は、全体的な資料の整備から文献の掲載許可といろいろ編集のお手伝いをさせていただきました。また、「カウンセリング倫理」についてまとめた文書を提供しました。この白書には紙幅の関係で私のすべての原稿を掲載することができなかったため、詳細は『よくわかるカウンセリング倫理』『最新カウンセリング倫理ガイド』(共に河出書房新社)の二冊本として出版させていただきました。カウンセリング倫理に対する興味は前々からもっていて、アメリカ留学中にも重点的に研究してきましたが、道徳白書の企画という刺激によって著書として結実しました。これらのカウンセリング倫理に関する本は、いろいろなカウンセリング関係機関で教科書として使われるようになりました。また、これが機会となり、カウンセリング関係機関の倫理委員や倫理教育講師を務めるようになりました。永安先生には、このことを大変よろこんでいただけました。

私の最近の二・三年の研究テーマは、自己反省の心理学的研究に焦点を合わせています。自己反省の研究をすすめていると「ゆるし」と「寛大さ」の研究がどうしても必要になります。そこで、ゆるしの心理学的

研究では著名なR・エンライト著 *Forgiveness is a Choice* を翻訳して出版することにしました。『ゆるしの選択』（エンライト著、水野修次郎監訳、河出書房新社、二〇〇七年）。この出版の頃になると、永安先生の健康もすぐれずに原稿を読んでいたことはできませんでしたが、出版された本を読んでいただけ、ゆるしの必要性について議論ができました。このように永安先生は私の著書すべてに目を通してコメントをしていただけでした。最近、本を贈呈しても内容について議論をすることができ人が少なくなり、永安先生のいない寂しさを実感することがありました。

よく思い出出すのが先生のいうインドの重要性です。インドは、日本と中国の中間にあって、橋渡しをすることができるという意味が分からなかったので、私を実際にインドに行かせてくれました。二〇〇一年にマドラス市郊外のサンスクリット大学 (*Rashtriya Sanskrit Vidyapeetha*) に交換教員として出かけることができました。一週間ほど現地で過ごし、二つの講義をしました。一つはモラロジの紹介と、もうひとつは発達心理学的に考察した日本人の心理構造でした。竹内教授の案内もあって、インドでの滞在はとても快適でした。インドは一見秩序ない町並みですが、実は秩序ある生活をしていました。例えば、人が勝手な方向を歩いて、自転車やバイクが勝手な方向に無秩序に走っていると思っていました。事故が皆無なので、車がホーンをならせば実に見事に進む道が現れるのです。インド旅行の帰りにはブータンに寄りました。この旅行のお陰で永安先生が意味するインドの仲介者としての特別な役割を理解することができました。

永安先生の最後の思い出は、先生を病院に見舞ったことです。先生は病室で血色もよく自分の手術のことについて話してくれました。心臓の手術について図を描いて詳細に解説をいただきました。私は手術の成功したことを聞いてとても喜んでいました。ところが、その後に院内感染が原因で亡くなられたという報告を

聞いて、しばらく我が耳を信じてことができませんでした。先生は、私がカウンセリング倫理の講演やワークショップで活躍している報告を聞いて「うらやましい」と一言もらしていました。先生もお元気ならば、講演会など多くの人に感動と真理を伝えることができただろうと思います。

先生との最後の思い出は『総合人間学モラロジー概論——互敬の世紀をひらく道徳原理』に関連するものです。先生は、原稿をいくつもコピーしていろいろな関係者からヒアリングをしていました。私にもその誘いをいただきとても光栄に思っています。カウンセリング関係の記述についての意見を求められました。二時間ほどの時間内でいくつか指摘させていただきましたが、先生は私のように浅学なものの意見でさえ、きちんとノートをとり真剣に受け止めてくださいました。

また、「モラロジーQ&A」コラムの執筆などで先生からコラムの書き方を教わりました。何度も何度も書き直して原稿を提出したものです。先生の指導でたくさんのコラムを書きました。文の書き方について懇切な指導をいただいたと思っています。

最後に永安先生にお詫びを申し上げます。私が二〇〇二年に麗澤大学で教えることになり、先生からご忠告をいただきました。辞退するようになると先生のお告にもかわからず、また私が再度にわたり関係者に辞退する旨を伝えたのにかかわらず、いろいろな事情があつて麗澤大学で教えることになってしまいました。先生が早稲田大学の教授という職を辞して麗澤大学の教授になられたという並々ならぬ決意と覚悟を知りながら、先生の高邁な理想にそうことができなかつたことを深くお詫びいたします。私のような浅学な者では、麗澤大学で教職につくには値しない学力と経歴であることを十分に知っています。その心痛のために、私は一年間という期間、不整脈を患い苦しみました。このことは私のことなので、永安先生に申し

上げてはいませんでした。

不思議なことに、永安先生にはこのような私をゆるしていただき、その後も暖かく接していただきました。先生には「かみつき言語」について議論したことがあります。真実を伝えるためには、あまりにも重い出来事や強い主張があると、その表現言語に攻撃性が出て、読者には噛み付きとして感じられて、聞く耳を持ってないことがあります。『モラロジー概論』での先生の記述には、そのようなかみつき言語は見受けられませんでしたが。実に円熟して柔らかい口調で真実が語られています。このように先生は温かいゆるしの心境に到達したのだと思います。私は先生の寛大さに甘えて浅学にもかかわらず麗澤大学で教えたり、研究センター教授というタイトルをいただいています。実に恐縮しております。

私の専門は極めて狭い分野である臨床心理学、あるいはカウンセリング学です。先生のように広範囲な知識のある学者になることはとてもできませんし、先生のご期待に十分適うことはできません。しかし、私なりに全力を尽くしてきたつもりです。先生どうか安らかにお休みください。私は、先生の叱責と励ましをいまだに生々しく聞くことができます。先生の声は今日でも私の耳に残っております。私は実力不足ですが、決して怠ることなく精進することをお誓いします。この覚悟をすることが先生の学恩に報いることだと想っております。